

特別研修

月例研究会 議事録 (11 月)

2009 年度第 7 回

報告題名 遊休農地の解消に市民参加による効果 —直売所と市民農園の新たな関係—	
報告者 水澤長之 (所属分野) 農業経営経済学分野	日時 11月26日 15時から17時 場所 第8講義室
座長 柳瀬	議事録担当者 小山田
出席者 安江、米倉、川島、工藤、伊藤、齋藤、澁谷、水澤、小山田、韓、デッフィ、松井、ステン、ソ、八木、柳瀬、宮本、カルナ、マヌルン、安部、神浦、佐々木、福田、水木、宮里、渡邊、北脇、遠藤、月僧、齋藤、中村、山下	
報告要旨 増え続ける遊休農地防止対策に、農家の規模拡大や新規就農を待っているだけでは解決しない。水田ではバイオエタノールや飼料米の作付けも試されているが、畑は今のところ妙案がない。そこで、市民農園に注目する。趣味や生きがい、健康や実益を求めて益々人気が高まっている。さらに、野菜作りの腕が上がってくると自給分以上に余剰が出るが、営利販売の目的以外なら出荷が可能になって、ステップアップしてやりがいも生まれた。一方、その受け入れ側の直売所も増え続け、売り上げも右肩上がりである。 今回は、市民農園のもつさまざまな可能性を探り、直売所とうまく結びつける仕組みを検討する。	

質疑・応答

柳瀬：市民農園の開設数が、平成5年3月末から平成19年の14年間で1039カ所から3246カ所と3倍に増加しています。これは行政主導で推進していった3倍に増えたということですか？

水澤：法律的には、特定農地貸付法や市民農園促進法によって、今までよりも市民農園が利用しやすくなったという背景もあります。それから、市民農園の利用方式として、「入園利用方式」も市民農園の数と同程度あると推計されていて、それも市民農園が利用しやすくなった理由です。行政が関わったから、というのがありますが、それだけでなく、市民が豊かになってきて、緑に触る機会が求められるようになった、というのも市民農園の開設数が増加した背景にあると思います。

澁谷：輸入野菜に、市民農園で作ったアマチュア野菜を対抗させる、ということがスライドに書かれています。アマチュアの野菜が輸入野菜のようなプロの野菜を圧倒してしまうということはないでしょうか。

水澤：今までの例では、プロの野菜とアマチュアの野菜の差は歴然としているので、そういうことはないと思います。鮮度という点ではアマチュア野菜の方が勝っていますが、価格という点ではプロの輸入野菜の方が勝っています。それに、そもそも直売所に輸入野菜を置くということはあまりないかもしれません。それから、野菜作りが上手なアマチュアはいますが、平均してみると、アマチュアの野菜がプロの輸入野菜を圧倒するということはないと思います。

安江：練馬区や世田谷区では都市農地家と協力して体験農園が行われています。参加するのは地域の住民で、経営側は価格をある程度設定して、年間の費用の分のお金をもらって、相続税もある程度緩和してもらっています。そういう体験農園と、今回紹介されている栽培指導型市民農園はどのように住み分けできるのでしょうか。それから、栽培指導型市民農園は行政主導、体験農園は農家主導ということなのでしょうか。

水澤：住み分けについてですが、栽培指導型市民農園に比べ、体験農園では自主性が失われるというところがあります。栽培指導型市民農園では、土地を借りれば何でもすることができます。それに対し、体験農園ではその時々で何をするかということが決まってしまうというところがあります。そういう、栽培指導型市民農園のように自由なものと、体験農園のようにある程度決められたもの、そしてそれらの折衷型という3タイプがあると思います。それから、行政主導か農家主導かという点についてですが、これは農家の意向を調べないとわかりません。

米倉：遊休農地の解消がこの研究の一番の課題に設定しているのだと思いますが、そもそも遊休農地は利用しなければならぬものなのではないでしょうか。土地のストックを守るべきだという議論があるのだと思いますが、それが日本経済全体と関連してどういう意味を持っているのでしょうか。それから、ここで議論されているのはあくまでアマチュアの農業を育てようということなのではないでしょうか。あるいは、将来の農業を支えるような農家の参入と退出のあり方について伝統的な仕組みとは違うものをやろうというような、大きなビジネスモデルを目指しているのでしょうか。

水澤：遊休農地の解消ということについてですが、ヨーロッパでは、遊休農地でも、有事になればいつでも畑に戻せるようにしています。それに比べ、日本では立派な畑に量産店が建っているというような現状があります。そのような違いを考えると、日本でも農地は残した方がいいのではないかと問題意識があります。そして、そのためにはアマチュアも農業に関わるべきで、直売所を中心とした農業のあり方もあるのではないかと思います。ただし、大きなビジネスモデルまでは考えていません。

米倉：農業における農家の参入と退出の新しいメカニズムを考えるようなものだと、スケールが大きく

て面白くなると思います。それから、直売所という流通面において日本農業の新しいあり方を考えるというのは重要ですが、地産地消というのは美辞麗句的によく語られる一方で、農家が自分のマーケットの幅を狭めているという側面もあります。それよりも、世界のどこからでも欲しいものを手に入れて食べるということの方が健康的な考えだと思います。そういうことと両立できるような意義や価値を考えた方がいいのではないのでしょうか。

水澤： 輸入は絶対にいけないという考えではありません。

農業への新規参入にはこれまで障壁がありましたが、直売所や市民農園がその突破口になっているという動きもありますので、そのことについてももう少し考えたいと思います。